



（仮称）第 5 次豊田市生涯スポーツプランの方向性について

資料 1

1 現状・ニーズと環境変化

●現状・ニーズ ○環境変化

（１）「する」スポーツ

<こども>

- スポーツを好きな児童・生徒の割合は高い状況（R5：小 90.3% 中 85.0%）
- 一方、スポーツ実施率は減少傾向（R1：小 38.7% 中 69.5% → R6：小 35.9% 中 56.4%）
- 熱中症リスク増大、コロナ禍によるスポーツ離れ、部活動時間の制限、部活動地域移行、デジタル化による生活習慣の変化
- ミライ実現戦略 2030（R7～R11）では、「こども起点のまちづくり」を重点的に実施

<成人>

- 成人のスポーツ実施率は減少傾向（R2：55.7% → R6：53.0%）
- スポーツ施策に望む内容の上位は、「年齢層にあったスポーツの普及」（33.5%）、「市民が参加できるスポーツイベントの開催」（31.7%）、「身近な地域のスポーツ施設整備」（25.5%）
- 熱中症リスク増大、コロナ禍によるスポーツ離れ、超高齢社会
- 第 3 次スポーツ基本計画（R4 年度～）で週 1 回のスポーツ実施率目標が引き上げ（65% → 70%）

<障がい者>

- 週 1 回以上スポーツを実施する割合は、国の目標（40%程度）と比べ低い状況（17.8%）
- スポーツを実施しない理由は、「興味がない」（42.3%）が最も高かったが、「教室や場所等の情報を知らない」（5.6%）「できるスポーツが分からない」（5.1%）など情報不足も要因
- 熱中症リスク増大、コロナ禍によるスポーツ離れ、超高齢社会
- 第 3 次スポーツ基本計画（R4 年度～）でスポーツ実施率「70%程度/年」が明示

（２）「楽しむ」スポーツ

<スポーツチーム等の認知度>

- 東京オリパラ開催年の令和 3 年度と比較し、市民のスポーツチーム等の認知度は低下傾向
- 一方、スポーツチーム等と連携したこども向けの取組は拡充中

<「みる」スポーツ>

- 豊田スタジアム、スカイホール豊田ともに大会数・観客数は増加
（スタジアム R1：14 件・498,096 人→R5：27 件・636,274 人 スカイ：R1：6 件・36,889 人→R5：25 件・106,442 人）
- 一方、令和 8 年度のパロマ瑞穂スポーツパーク開業や三河安城交流拠点アリーナの開業で、今後、スポーツ試合数（観戦機会）が減少する可能性

<スポーツツーリズム>

- 大規模スポーツイベント開催時の市内消費額はコロナ禍以後減少（R1：11,055 円/人→R5：8,211 円/人）
- 令和 8 年度のパロマ瑞穂スポーツパーク開業や三河安城交流拠点アリーナの開業で、今後、観客数（来訪者）が減少する可能性

（３）「支える」スポーツ

<スポーツを支える活動>

- スポーツを支える活動をした割合は増加（R2：5.2% → R6：9.3%）

<スポーツ施設>

- 学校施設開放の利用団体への調査では、「学校の体育館・武道場への空調導入」（58.6%）、「施設予約の利便性向上」（55.9%）が上位ニーズ
- アジア・アジアパラ競技大会に向けた施設整備、中央公園二期整備

<情報発信>

- 情報不足を感じる内容としては「施設の場所」、「施設の内容」と回答した割合が高い。

2 （仮称）第 5 次豊田市生涯スポーツプランにおいて重視したい視点

視点 1 こども起点

- ミライ実現戦略 2030 で注力 ●部活動の地域移行 ●スポーツ実施率は減少傾向

視点 2 快適で利便性の高いスポーツ環境

- 熱中症リスク増大 ●スポーツ実施率は減少傾向 ●市民ニーズも高い

視点 3 まちの魅力創造・活性化

- 大規模スポーツイベント減少の可能性 ●コロナ禍以降の消費額の減少
- 豊富なスポーツ資源（豊田スタジアムやスカイホール豊田、スポーツ施設充足率が中核市 4 位、アウトドアスポーツを楽しめる豊かな自然環境、市内を拠点とする多数のスポーツチーム等）

3 （仮称）第 5 次豊田市生涯スポーツプランの方向性

（１）めざす姿（案）

第 4 次豊田市生涯スポーツプランの「めざす姿」を踏襲

**様々な世代が、スポーツを通じて楽しく健康で
生き生きと活躍しており、まちの活性化につながっている。**

スポーツを通じて、年齢、性別、障がいの有無等に関わらず、市民一人ひとりが生涯にわたって心身ともに健康であり、人との交流などを通して生きがいを持って活躍することで、まちのにぎわいや魅力が創出され、活性化につながっていくことをめざします。

（２）基本方針（案） ※めざす姿を実現するための施策展開の方向性

（１）こどものスポーツ体験機会を広げていきます

- ・近年、こどものスポーツ環境は様々な制約を受けておりスポーツ実施率は低下している。
- ・心身の健全育成や生涯にわたりスポーツに親しむきっかけとして、こども期におけるスポーツとの関わりは重要であるため、こどものスポーツ体験機会を拡充し、スポーツに取り組むこどもを増やしていく。
- ・園、小・中学校、スポーツ団体との連携を強化し、発達段階に応じたスポーツ機会を提供していく。

（２）全ての市民が安心・安全・快適にスポーツに取り組める環境をつくります

- ・熱中症リスク増大により、市民がスポーツを行えない日が増えている。
- ・年齢・性別、障がいの有無等に関わらず、市民が安全・安心・快適にスポーツに取り組めるよう、空調をはじめとしたスポーツ施設環境の充実を図っていく。
- ・市民のスポーツ拠点として中央公園二期整備を着実に実施するとともに、TOSS システム改修や学校施設開放の予約の電子化を進め、利便性を向上し利用拡大を図っていく。

（３）豊富なスポーツ資源を生かし、まちの魅力創造・活性化につなげます

- ・国際大会や国内トップレベルの大会が開催可能な豊田スタジアムやスカイホール豊田をはじめとしたスポーツ施設を多数保有するとともに、アウトドアスポーツを楽しめる豊かな自然環境も多数存在している。
- ・これらを活用して市民のスポーツ実施・観戦や誘客を促進し、まちの魅力創造・活性化につなげていく。

（４）多様な担い手と連携し、スポーツ施策を推進していきます

- ・スポーツ協会、スポーツ競技団体、地域スポーツ団体、スポーツ指導者、企業、大学、スポーツチーム、スポーツボランティア、こども園、学校等の多様な担い手が存在している。
- ・上記（１）～（３）の取組効果を最大化するため、情報発信・共有を含めた施策実施時における連携を強化し、市民の「する」、「楽しむ」、「支える」スポーツを一体的に推進していく。